



## 新たな 100 年の行路を歩む経済学部

前経済学部長 山田幸三



経鷲会の皆様には、いつも経済学部に対するご支援、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。ご承知の通り、経済学部は2013年に創立100周年を迎え、新たな100年に向かって着実に歩みを進めています。「叡智が世界をつなぐ」という上智大学のミッションの下、「世界に並び立つ大学」の一翼を担う学部として、「フロンティアを目指す研究」「学生と顔の見える関係の基幹教育」「外部機関と連携した多彩な学びの機会をもった専門教育」で一層の発展を図るべく、ファカルティー一同日々研鑽に努めています。

日本経済は、これまでの成長を支えてきたキャッチアップ型経済から脱却し、本格的な高度知識基盤型経済へと変貌を遂げています。日本企業も、国境を越えて事業活動を展開し、新興国の市場開拓と事業範囲や生産規模の拡大を目指すグローバル成長戦略が一層求められるようになっていきます。グローバルな視点から前向きに思考して行動することで社会の諸問題を解決し、より良き社会を構築することが現代に生きるわれわれの使命です。

同時に、阪神・淡路大震災と東日本大震災という歴史的な災禍に見舞われた日本社会では、地方の経済活性化や人口減少対策を進める政策を通じて、いかにして地域社会の活性化を図るかも主要な課題となっています。日本の各地域の独自性・優位性を有効に活用して問題を解決し、経済的、社会的な価値を生み出すには、現在の制度や仕組みを新たな方向性のもとで再構築するイノベティブな活動が必要です。そのイノベーション創出の原動力として、アントレプレナーシップを発揮できる人材が脚光を浴びています。

上智大学は、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択されました。経済学部では、2020年と2022年を目途に全学的な連携によって、経済学科と経営学科に英語の授業科目のみで学位を取得できるコースの開設を予定しています。その第一段階として、2016年度には経済学部・経済学英語特修プログラム (Faculty of Economics, Economics in English Program) を経済学科に新設し、2018年度には経済学部・経営学英語特修プログラム (Faculty of Economics, Management in English Program) を経営学科に新設して、厳しい基準を満たした学生に対して学部から修了認定証を授与します。

このプログラムの目的は、英語で経済学・経営学を学ぶことによって、留学やグローバルなレベルでのキャリア形成に必要な能力を養うことにあり、海外へ雄飛しようとする学生にとってファーストステップとなると確信しています。

経済学部は、上智大学の最も伝統ある学部の1つとして、多くの有為の人材を輩出してきました。イギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルの言葉、“cool head but warm heart”を今一度思い起こし、社会と人類に温かい眼差しを向けながら、これまでの常識に過度にとらわれず、新しいものの見方や考え方で挑戦する自律した人材の育成に努めることが、学部教育の重要なミッションと考えています。さらに、経済学部創立75周年を契機に創設された経鷲会との連携は、学内でのモデルケースとなっており、卒業生との繋がり、絆をより強固にすることに努めたいと思います。今後とも一層のご支援をお願いいたします。

最後に、2009年から1期、2013年から2期、通算3期6年間にわたり、学部長として学部創立100周年記念など諸行事に関わる機会に恵まれ、経鷲会の皆様にはたいへんお世話になりました。厚くお礼申し上げます。経鷲会と会員の皆様の一層のご発展をお祈りいたします。ありがとうございました。



## 私の偉大な恩師—ロバート・バロン先生

戸川宏一 (1963年 経・商)



あれは約30年前だったのだろうか、私がバロン先生の研究室を初めて訪れ、先生の研究室の前に立ってノックをしようとした時、中からパイプ煙草の心地よい匂いがしてきた。私の父もヨーロッパに留学していたせいも、パイプがとても好きで、子供のころ父の書斎に入ると同じようなパイプ煙草の匂いがしていたことを思い出した。

バロン先生には私の父のような親しみを感じ、先生の研究室に足が向くことが多くなり、先生の研究室にお邪魔して、英語で様々なことを話し合う機会を頂戴した。生きた英語の勉強になった。また先生と話していると、心がとても落ち着くのを覚えた。パイプ煙草の匂い、やさしい眼差し、そしてどんなことでも真剣に聞いて下さる先生の姿は、今でも目に焼き付いている。

先生の実業界での人脈の広さは、とても驚くべきもので、故アベグレン先生をはじめ、多くの有名な学者や実業家をご紹介頂いた。このことが、その後の私の人生に、とても大きな影響を与えてきていると思う。

バロン先生は、企業経営、特に経理の専門家であると同時に、人事、人材開発についてもとても詳しく、時々様々な指摘や提案を頂いたことを思い出す。会社で組合との話し合いの矢面に立って解決を強いられていた時、先生のお話はとても勇気づけられ、参考になった。

約20年ほど前だったか、会社で米国への転勤を命じられ4年間赴任したが、その時先生は、とにかく米国の大学院を卒業してくるように勧めて下さった。と言うのは、以前、どうすれば上智の比文で教鞭をとれるかと先生に伺っていたので、米国の大学院のMBAをとってくれば、教える機会があると教えて下さったのだ。4年後に日本に帰国して、久しぶりでご挨拶に伺い、赴任地のアリゾナ州立大学のMBA for Executivesを修了してきたことをお伝えしたら、とても喜んで下さり、早速、比文で財務・経理の授業を英語で教える機会を頂いた。その後も、交換留学生に対する人材開発や人事の講義もさせて頂いたし、EUに関する話し合いの場に参加させて頂いた。様々な機会に気軽に招いて下さった。

バロン先生との出会いがなかったなら、多分私の人生は違ったものになっていただろう。それほど私の人生の節目で、先生からの確かなアドバイスを頂いたと思っている。

今先生が生きておられたなら、他大学にはない、上智の特徴を生かした、全て英語で教える「上智ビジネススクール」、あるいは、社会人対象の「MBA for Executives」が実現できたかもしれない。バロン先生や豪華な講師陣と共に、何人かのソフィアの有志が結束して実現したかった大きな課題であり、夢である。バロン先生もそれを願っておられたのかもしれない。

(日本経営管理協会 副理事長・元経鸞会会長)

## 歌舞伎を楽しんで半世紀

秋葉 哲 (1967年 経・経)



前の三之助(現菊五郎、故十二代目團十郎、故辰之助)が皆名門嫡子同世代、若さと新鮮さを漲らせ人気沸騰した頃から歌舞伎を観ている。勧進帳締めの花道「飛び六方」で辰之助弁慶が躍り上がり走り抜けた観客啞然の熱演、菊之助(菊五郎襲名前)のおっとりした女形振り、新之助(團十郎)の凛々しく泰然とした立役振りが印象に残っている。

当時松本白鷗の二人の子息、染五郎と吉右衛門は東宝に所属しており、帝国劇場で主に演じていた。折りから圧倒的な美貌の坂東玉三郎が奇跡のように現れた。若手花形歌舞伎が一斉に花開いた感じで、もう50年余りも昔のこと。新聞等の畏まった評論では必ずしも高評価が付かないことも屢々であったが、梨園先輩方は若手が思い切り活躍し易いよう按配していたようだ。颯爽たる美男片岡孝夫や幼年時から人気があった中村勘九郎も加わり1970年代初めの歌舞伎人気は高く、「時分の花」の華やかさを目の当たりにした時代であった。



歌舞伎は日本伝統の色彩に溢れている。黒だけでも墨染、烏羽、濡羽等10種以上もある。舞踊劇の時、三階席から舞台一面に千代紙を撒き散らしたような色彩を見下ろせるのは一階席では味わえない。日本橋の和紙の老舗「はいばら」の色彩がそれで、舞台の書割りには随所に工夫が凝らされ、綺麗な風景を見せている。舞台の大道具にも歌舞伎ならではの大胆な嗜好を見ることができる。実物復元を狙ったりリアルさとは違ったデフォルメの楽しさがある。伴奏は長唄、常磐津、清元、浄瑠璃、義太夫等と縦横無尽の豪華さで、お囃子拍子木の音は雰囲気盛り上げる。歌舞伎座、新橋演舞場、国立劇場の場内に掲げられた数々の日本絵画も必見で、国立劇場では平櫛田中作の木彫「六代目菊五郎鏡獅子」が見る者を圧倒する迫力で歓

迎してくれる。

役者は一生の間に数百回以上同じ芝居を演じる。観客も飽きもせず付き合っ観ている。役者さんの掌に入り込んだ演技の工夫を観続けることが値打ちと言わんばかりに…そして必ず後継（多くは息子達）が受け継ぐのである。その推移を見守ることも楽しみなので、私も長年観続けている裡に、役者さん達は悪役（敵役）に強い愛着を感じていることに気が付く。皆尋常ではない工夫を凝らして個性豊かに演じる。伽羅先代萩のお女中八汐が忠節一途の乳母政岡を思うさま罵る場面、伊勢音頭恋寝刃で団扇をあしらいながら悪罵を浴びせ続ける遊郭女将気取りの万野、於染久松色読販（お染の七役）で棺桶を担いで奔る土手のお六、仮名手本忠臣蔵で意地悪気に悪態を吐く高師直等々。万野と土手のお六を、悪役演技では非の打ち処がない玉三郎がさらっと演じたのが面白い。可憐な美女の印象があるだけにその違いが驚きである。玉三郎のお染の七役はもう観ることができない。



歌舞伎は観る者演じる者が楽しむものとの信念を貫いたのが、先年亡くなった十八代目中村勘三郎である。勘三郎親子三人と義弟中村芝翫（当時橋之助）他で演じた「連獅子」は観ながらわくわくするほど楽しい芝居である。意気が合った親子義兄弟が舞台全面を使って張り切った舞踊芝居を演じる。勘三郎、芝翫とも三階席の奥まで視線を届けるかのような素振りだったのを好ましく感じた。今息子さんの二人、勘九郎と七之助が懸命に役柄を広げ明日の歌舞伎を担おうと精進されている。昨年暮れに観た実感で、応援をしたいと思っている。（元(株)メンテックカンザイ 取締役東京支店長）

## この国の未来と女性の活躍

植村保彦（1981年 経・経営）

これからの日本の発展は女性の活躍が大きく左右すると思いませんか？

2016年10月2日、ある女子高生の活躍に日本（のゴルフファン）が沸きました。そう、ゴルフ愛好家の方はもうお分かりと思いますが、畑岡奈紗さんが日本女子オープンゴルフ選手権でアマチュアとして初めて優勝した日です。

畑岡さんは、私が役員として関わってきた広域通信制高校の女子生徒です。このメジャー大会を史上最年少で優勝した後、彼女は米国LPGAのプロテストにも合格し日米のプロトーナメントで活躍し始めました。自らがやりたいことに日中のプライムタイムを使い、それ以外の時間で勉強することが可能な通信制高校の仕組みを活用し、見事、世界に羽ばたいていきました。

最近、ダイバーシティという言葉をよく目にします。民族、性別、価値観など多様性の受容を意味しますが、この中でもとりわけジェンダーダイバーシティは日本の未来に大きなかわりをもっていると考えています。

人類の歴史のなかで筋肉量が稼ぐ力（経済力）に影響した時代には、狩猟や農耕、時として戦いは男の役割、家事や子育ては女性の役割という分担が種の存続や生存に適しており、結果、男女間の固定的な分業体制が形作られました。しかし、科学技術が発達し、比較的平穏な現代においては、稼ぐ力はジェンダー間の差異が本質的にあまり生じないはずであり、その違いは稼ぐ役割にこれまで累積的に就業しているジェンダーの数の差、そして組織的ヒエラルキー上位に位置するジェンダーの数の差によるのではないのでしょうか。

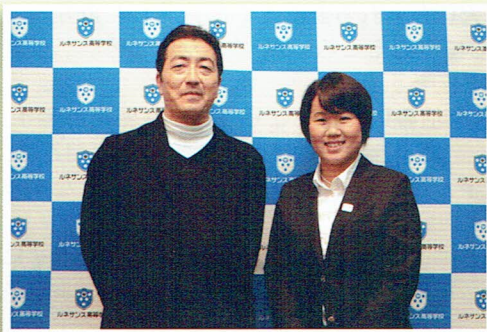
家事については電化製品の発達や食の向上に伴い、いずれのジェンダーが行っても質的差異はさほど生じない時代になりつつあります。私個人では家事の能力が相当低いと認めざるをえないのですが（苦笑）。子育てにおいては性差による出産・育児能力の差が存在しており、男性の役割は極めて限定的といえますが、この能力差も育児の面では、ある程度緩和されつつあるように思えます。

そうすると、残るは男女の意識（意思）、就労機会の最適化（事実上、女性の就業機会拡大、地位・役割の向上）が経済力バランスとダイバーシティ推進の鍵になると考えています。

昭和の男児である私はどうしても、旧来の役割分担が染みついているので、これからの新しい時代の生き方の多様性、働き方の多様性、女性の就労方法や環境の多様性を思い描くことに限界を感じますが、それでも身近で起きている事柄を考えると、大きな潮流としてのジェンダーダイバーシティは進んでいることを実感します。

最近、あるセミナーにおいて自撮りSNSのサービスを提供する会社のCOOである女子高生と話をする機会がありました。将来、小学校を作りたいという夢、野心を聞かされました。自分が高校生のころを振り返ると、そのような夢や野心を持ち合わせていなかったの、若い芽の遅し、行動力、クリエイティブな発想に驚かされました。

私ごとながら、ここ2年あまりの間に父、母が相次いで他界し、色々



な想い出と遺品を整理する中で、自分に残された時間を逆算し考えたとき、自分に何ができるだろうかと改めて問い直しました。これまでも縁あって他大学のビジネススクールの院生指導を手伝うなどをしてきましたが、子供と家族への義務も終えつつあるので、自分の中のライフワークとして、グローバルの中で日本人の競争力向上のため、後進の育成や女性の活躍支援がテーマとして浮かび上がっています。その一つとして母校の同窓会組織である経鷲会でお手伝いできることがないかを模索し始めました。

さて、経鷲会では今春、女子部会を立ち上げることが計画されており、卒業後も女性ソフィアンがソフィアンのため、より広くは社会のために活躍するきっかけの場となることが期待されています。皆さんも参画してみませんか？

(CDN ソリューションズ株式会社 代表取締役社長)

## リタイア後の人生観

大武宏至 (1978年 経・経営)



両親の介護や入院サポート等のため、60歳目前でサラリーマン生活からリタイアした。60歳を超えると、勤務を継続しても年取が大幅に減ることや、家族からの要請もあり退職を決断した。しかし、いざリタイアしてしまうと、折角の余暇を持てあまし、もっと働くべきだったか、このまま私の人生は一丁上がりか、とリタイア前後の生活のギャップに悩んでしまう。

私が嫌いな小説のひとつに『終わった人』(内館牧子, 講談社, 2015)がある。この小説にはまさに私ども初老世代の悲哀・苦悩が描かれており、国立大卒で相応の管理職になったサラリーマンの左遷・定年・定年後の物語が綴られている。この主人公は「終わった」生活になじめず、新たな仕事に飛びついたが、大失敗して大損をしてしまう。しかし、この主人公は下記の「下流老人」になったわけではない。

『続・下流老人』(藤田孝典, 朝日新書, 2016)によると、下流老人とは「年金や貯蓄が少ないうえに、病気や事故、熟年離婚など、やむを得ぬ事情により貧困生活を強いられている高齢者のこと」とある。想定外の要因、例えば、熟年離婚の場合や離婚した子が複数の孫を連れてきてしまい、その生活費や教育費を負担する羽目になった場合は、現役時代に高収入でも、下流老人となる可能性があるという。この著者は「今の社会で絶対に下流老人にならない方法は存在しない」と述べている。

リタイア後の人生は、収入減という経済的な問題だけでなく、深刻な高齢化問題(社会保障・福祉の低下等)の当事者となる。この現状を受け入れて、人生を充実しQOL(Quality of Life)を維持する術はあるのだろうか。

まず下流老人問題に対しては、「ただただ“下流になる”ことに怯えて生活を送るのは人生の大きな損失である。(略)究極的にいえば、よほどの不運に見舞われた人以外は、自らの到達点について自分自身で責任を取るしかない。(略)“下流老人”という言葉聞いて、ただ右往左往するのは杞憂以外の何ものでもない。そんなことに悩まされる暇があったら、まず一步を踏み出し、自らの足下を着実に固め、自分の老後を充実させる工夫を一つでも重ねたほうがいい。」(『実践快老生活』渡辺昇一, PHP新書, 2016)という見解もあり、下流老人論を一蹴する。『老老格差』(橘木俊詔, 青土社, 2016)というとらえ方もあるが、同様に一蹴されたとみなしていい。

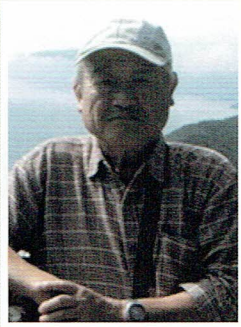
また、『人口と日本経済』(吉川 洋, 中公新書, 2016)では、「超高齢化社会において人々が“人間らしく”生きていくためには、今なお膨大なプロダクト・イノベーションを必要としている。(略)人口が減っていく日本国内のマーケットに未来はない、という声をよく耳にするが、超高齢化社会に向けたイノベーションにとって、日本経済は大きな可能性を秘めている。」と、超高齢化社会の将来に期待が持てると論じているものもある。

それでは、リタイア後の人生を無為に過ごさないために、どのような工夫が必要か。そのための何らかのヒントになるような事例を最近の新書で探してみた。しかし、「地域型コミュニティに参画する」「家族の絆を再構築する」「自己啓発・自己開発」等々、誰でも思いつき、リタイア直後には受容しがたい結論しか見いだせなかった。(『新しい幸福論』橘木俊詔, 岩波新書, 2016, 『超ソロ社会』荒川和久, PHP新書, 2017, 『下流老人と幸福老人』三浦 展, 光文社新書, 2016等)

なぜ、このような結論にしか至らないのか。多分年金生活になってから天に召される直前までを体験した市井の人が論じていないからではないか。そこで、なるべくご高齢の方の著作を探してみたところ、「年齢は常に初体験」(『老後の味わい』黒井千次, 中公新書, 2014)という気に入った言葉に遭遇した。

そういえば、リタイア後の生活は、毎日が常に未知の領域で、自ずと日常生活の中に自分なりの新たな発見があり、日常の中に非日常が見いだせる様になる。シニアの方がよく行っている伝統芸能・音楽鑑賞、美術館・博物館巡り、史跡巡り、下町巡り、文学作品の読書といったことが「新たな発見」の機序となるのではないか。今までできなかったことを手広くやってみてその後気に入った事案を取捨選択、発展させればいい。

なお、私は1人者ですが、前記『下流老人と幸福老人』では、引用したシニア調査から「1人暮らし男性を幸せにするのは子供や孫よりガールフレンド」と分析している。これは誰も否定しないことと思う。ただし、トラブルが発生した場合は、男性側が下流老人化してしまう可能性が大いにありそうだ。



## 50年戦争と満州(上)

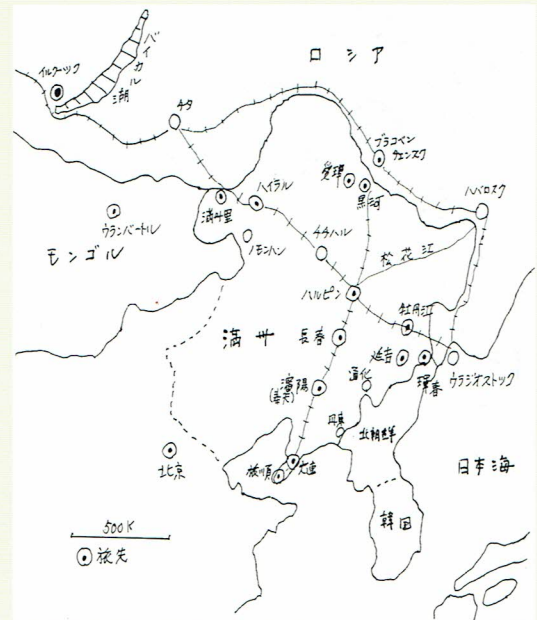
金剛輝雄 (1964年経・経)

日本は明治半ばから敗戦までのわずか半世紀の間、戦争の明け暮れだった。

顧みると明治27年の日清戦争で朝鮮の支配権を得、明治37年の日露戦争でロシアから中国東北部、満州の租借権を取得、明治43年に朝鮮を併合した。初期に起こった

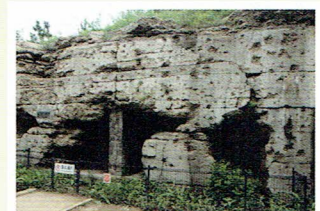
経済不況が原因で貧困農民層を国外の新開地へ送り出すという対外強硬論が軍部の間で台頭し、世論の受けも加わって、軍部は政府の反対を押し切りこれを強行、昭和7年満州国を建国した。この無理が導火線となり、南方戦線へ拡大し、太平洋戦争へと突入していった。

私は平成24年7月と平成27年8月の2度、およそ30日かけて、友人と2人でこの半世紀、戦場となった満州とその国境周辺を見て回った。この旅は満州で諜報活動に従事した陸軍少佐石光真清の手記に感銘し現地に行ってみたいという思いから始まった。また旅の後に読んだ船戸与一の「満州国演義」が旅の内容に厚みを加えてくれた。この見聞記は私が訪ねた町や土地の印象を記したものである。



### 旅順

多大な死傷者を出し熾烈を極めた日露戦争の終結地。203高地は山の形状が変わるほどだった。最終戦は旅順港を見下ろす東鶏冠山であったが、塹壕には写真のような弾丸の跡が生々しく残っていた。農家の水師営で行った停戦合意は乃木大将とステッセル将軍との会見として有名である。



### 大連

遼東半島の突端部にある軍港都市。町の中心地には満鉄(南満州鉄道)が建てた大和ホテルや横浜正金銀行(旧東京銀行)大連支店(写真)があり、現在もこれらの施設は高級ホテルとして、また中国銀行大連支店として使われている。

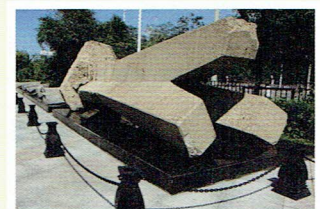
当時の大連支店長は2人の召使いを雇うほど裕福な生活をしていた、と支店長の息子だった友人が語っている。



### 奉天

現在の呼称は瀋陽。軍閥最大の張作霖の本拠地。彼は北京の蒋介石に追われ奉天に逃げ帰るが、依然として彼の軍政は強く、排日運動も盛んだった。昭和3年6月関東軍の高級参謀、河本大佐の仕掛けた鉄道爆破により殺され、以降長男の張学良が奉天軍閥を継承。中国東北部を実質支配していた。

写真は柳条湖線路爆破の橋桁の残骸。どうもウソ臭い。レプリカだろう。



### 長春

満州国の首都で日本名は新京。写真は関東軍司令部旧址。現在同建物は中国共産党吉林省委員会が使用、歩哨が門戸を固め、高級官僚を乗せた黒塗りの車が入りし、奥の方に天守閣が聳え立つ。不気味であり違和感を覚えた。近づいてカメラを向けると歩哨に威嚇されNG。道路を渡って向かい側から盗み撮りをした。

偽満皇居博物館には満州国皇帝溥儀の執務室がある。廊下を挟み向かい側には関東軍参謀吉岡安直の部屋があり、溥儀の行動を常時チェック、監視していた。内閣は中国人に委ねていたが、実権は関東軍司令部が握っており、偽満といえる由縁だ。司令部に隣接して関東軍将校用の立派な慰安施設があった。その施設は現在迎賓館として共産党幹部が使用。



## ハルビン

明治33年扶清滅洋を唱える義和団事件によりロシアは清国から満州の租借権を取得、実質占領していた。町のあちこちにロシア正教の教会があり、建物や町の様子がロシア風で中国の匂いがしない。日清戦争の前からロシアは朝鮮や日本の侵略を企てていた。軍事物資の輸送路は北回りのシベリア鉄道では時間がかかるので、チタから満州里、チチハル、ハルビン、牡丹江、ウラジオストックに通じる新線、東清鉄道（明治36年完成）の敷設を急いでいた。東清鉄道が敷かれる以前はハルビンとハバロスクを流れる松花江が重要な交通ルートであり、対ロシアのスパイだった石光真清はこの河川を使ってハルビンに潜入していた。町から北20キロのところ、第731石井部隊が駐屯していたが、時間がなくて行けなかった。



## 黒河・愛琿

中国とロシアの国境(右写真)。ハルビンから北650キロ。アムール川(川幅500メートル)の対岸は、ロシア領ブラコベンチェンスクの町。ロシア軍南下のシベリア出入り口。ロシアの船着き場や町の建物がはっきり見える。国境線はアムール川の中央が境界で中国の遊覧船やロシア貨物船が行き交う。通関事務所は閑散としており、人の出入りはまばらだった。



関東軍はこの辺境地にも黒河特務機関を置き、排日の旗頭、馬占山を追跡してチチハルや当地にまで来ている。ここにも特務機関があった。

愛琿は黒河市から南西30キロ、清朝時代の愛琿都統府があった。この場所は後にロシア軍が清国侵略の口火を切ったところとして知られている。

(著者は元横浜銀行新橋支店長など歴任)

編集部(注)「50年戦争と満州」の後半は次号に掲載します。

## 経鷺会「女子部会」ご参加のお誘い



「上智大学経済学部同窓会(経鷺会)」の中に、女子卒業生・在学生による「女子部会」を立ち上げることになりました。

現在、経鷺会の役員・代議員の多くは男子卒業生で、総会の出席者も9割が男性です。経済学部卒業生は女性が増えていますので、同窓会にもっと多くの女性に参加していただきたいと思います。女性からみた発想が欠けているために参加しづらいのでは、とのご意見もあり、今回の部会設立になりました。

上智の教育精神“Men and Women for Others, with Others”を、「女性による、女性のための、女性の(By the Woman For the Woman, Of the Woman)部会」で実現したいと思います。

具体的には、1) イベント、講演会、勉強会、上智大学への貢献活動などの企画・実践、2) 在学生との交流、3) 社会貢献活動、などですが、女性が参加したくなる内容の企画を考えましょう。

ただし、経鷺会のひとつの部会ですので、女子部会の企画の実現や実行には男性のサポートやご参加を歓迎します。3月6日(月)に準備会を行い、女性部会を実現する方向で経鷺会役員からご賛同を得ました。後に続く女子エコノミアンのために、道筋を作りましょう。

まずは、組織づくりと名簿づくりからスタートですので、次のアンケートにお答えいただければ幸いです。

以下についてお答え下さい。(経鷺会女性会員のみ)

1) 名簿に記載できる方は、以下についてもお知らせ下さい。(名簿は目的以外に使用しません)

◇お名前: (西暦 年 学科卒)  
◇連絡先: e-mail 電話番号 ご住所など

2) 「経鷺会・女子部会」に

- ① 参加したいと思います。
- ② 企画や実施などに積極的に参加したいと思います。
- ③ 積極的に関わるのは難しいですが、情報は送ってほしい。
- ④ その他 ( )



準備会の面々

☆アンケートの送付先・問い合わせは、jfukuda@jiu.ac.jp (福田のe-mail) です。

電話・Faxは、03-3688-3834 (自宅) です。多くの女性会員のご参加をお待ちします。(発起人:福田順子(1968年卒業))

— 年会費納入のお願い —

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

## 世界市場は口コミ「つぶやきマーケティング」の時代へ

蟹瀬令子 (1975年 文・英)



マガジンハウスの雑誌、クロワッサンは今年発刊 40 周年を迎える。創刊号の頃から、私はいろいろなテーマで取材を受けてきたので、40 年と聞くと、時の流れの早さに今さらのように驚く。そういえば、私たち夫婦も結婚 41 年目を迎える。

クロワッサンはその当時としては珍しく、まったく無名のその道のプロフェッショナルや私のような市井の素人を取り上げ、個人がもつセンスや食に関するこだわり、生きざまなどを紹介し、読者と価値観をシェアしてきた。当時、テレビや雑誌の全盛期にクロワッサンはあえて口コミサイトのような編集をしている。いわば、現代版井戸端会議である。また驚くことに、雑誌で取り上げたキッチン用品などが話題になると、いち早くそれを紙上で売り始めた。時代を読む目が実に確実だ。

クロワッサンが 40 年間やってきたこと、それが、今ネットの中で起こり始めている。素人が SMS を通して、食へのこだわりや、趣味、インテリア、スポーツ、ファッション、暮らし方、そして、社会や政治に対する意見まで、ありとあらゆる分野について発信し始めた。EC サイトには小さな個人商店が駅前商店街のように並び、へき地で細々とやっていた農家の野菜や果物が脚光を浴び始めている。そして、オークションサイトでは個人が不要になった品を売し、さながら露天商のようである。

一億総商人、一億総コメンテーターの時代。かつて、私が広告代理店時代に提案してきたテレビや雑誌、新聞媒体でのマスマーケティングに陰りが見え始め、口コミによる「つぶやきマーケティングの時代」に入ってきた。それは個人の小さな小さなつぶやきでしかないけれど、注目すべきは、人々がその個人と価値を共有し、その個人の生き方を良しとしたうえで、つぶやき情報を拡散していく点である。

10 年前、私はイギリスの自然派化粧品会社ザ・ボディショップの社長を退任し、レナジャポンというスキンケア会社を立ち上げた。当時ヨーロッパでバレエをやっていた愛娘のひどい肌荒れを治すために、植物由来の原料をベースに、世界一のメイドインジャパンのスキンケア商品を開発しようと、55 歳で起業した。

前職で経験した小売りの知識をフルに活用しながらも、まったく新しいことをしたい。それは「実店舗を持たずに世界を市場に商売をする」ことであった。そんな時出会ったのが EC ビジネス。ネット通販である。10 年前のネット通販はまだまだ市民権がなく、「安から悪から、おまけに泥くさから」の三悪イメージ。「そんなところで商売を始めてもうまくいくわけがない」と陰口を叩かれ悔しい思いもした。それでも私の中では、もうすぐそこまで EC の時代が来ていること、世界が市場になりつつあること、そして、ブランド力を持たない商品でもネットの中ならお金をかけずに高級ブランドにつくりあげることができることを、確信していた。

誰もが、ネットでカンタンにものを買う時代がくる。それまでには「レナジャポン」をプレミアムブランドに成長させる。その夢は 10 年目を迎える今、叶おうとしている。それはあたかも、クロワッサンが選んだ市井の人々にも似ている。

SMS の中で、お客様やアンバサダーの声がこだまとなって、EC 市場に世界中から買い物客が訪れる。そんな日がやってきた。今年アメリカにも進出する。レナジャポンは、そこでも、SNS の「つぶやきマーケティング」でブランド発信を始めている。

(レナ・ジャポン・インスティテュート(株) 代表取締役)

研究奨励金  
受賞者

### 経鷲会研究奨励金への御礼

桂田 響 (経済学部経営学科 3 年生)



この度は、経鷲会の皆様から研究奨励金をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。このような大変名誉ある奨学金を頂戴いたしましたこと、大変光栄に存じます。また同時に、より一層多岐にわたり精進していかなければと身の引き締まる思いでございます。

私は経済学部経営学科開講のゼミナールに所属しており、企業会計について勉強しているところです。最初の発表課題は、日本の会計基準から国際会計基準に変更した企業についての分析でした。変更の理由や影響、特に変更した際の数字情報の違いなどを分析するものでした。様々な業界の会社の発表を聴く中で、各々の事情や共通した理由を知ることができました。グローバル化の波が起きていて、世界中の投資家との関係をより重要視していく流れを感じることができました。

一番関心を持つことができた課題は、実際に行われた M & A の案件について分析し評価を考えることでした。M & A は多額の資金を用いて行なわれる企業の重大な意思決定の一つであり、成功するかどうかによって企業の経済活動に大きな影響をあたえるものです。そのため、M & A や業績の変化を分析することで企業が描く事業計画や成長分野を推察することができました。

経済学科の授業やゼミナールの演習は、知識を得るだけでなく、物事や世の中の変化を様々な視点や観点をもって



見ることの大切さを考える機会となりました。情報を取捨選択できる力は、今後仕事をしていくとき重要な能力であると気づかされました。授業から学んだことや大学生活で経験したことを、社会人になってから活かしていけるかが求められていると今は感じています。

最後になりますが、このたびの奨励金授与に対しまして重ねてお礼申し上げます。

## 経鷺会ゴルフコンペ

田中良太郎 (1994年 経・経)



2017年3月9日に快晴の空の下千葉県柏市の名門藤ヶ谷カントリークラブにて経鷺会ゴルフコンペが行われました。昨年発行のエコノミアン Vol.51にあった「気軽に参加できる経鷺会ゴルフコンペ」のキャッチコピー通り、とてもアットホームで和やかな雰囲気のもとで、スコアはともかく、とても楽しくラウンドさせていただきました。同組の田村先輩、吉澤先輩には、私がミスショットをしても励まして頂き、大崩れせずにラウンド出来ました。

また、同じく同組の英語学科卒の須藤さんに昨年経鷺会ゴルフコンペの存在を知らされて参加し、先輩方とラウンド中や懇親会などでお話するチャンスも作って頂いたり、感謝しております。

私は1994年に大学を卒業後、しばらくして香港で商売を始めました。最初は全く余裕が無かったのですが商売も軌道に乗り始め、運動とストレス解消を兼ねてゴルフを始めました。中国広東省の深セン市の隣の恵陽市にあるパームアイランドゴルフクラブの会員になり、暇な週末は香港から通いつめました。同期の経済学科卒の閻田さんが北京駐在時には北京でゴルフをしたり、同じく同期で経済学科卒の村井さんと英語学科卒の須藤さんがロンドン駐在時には、ゴルフの聖地 St. Andrews にも行き、旧交を温めつつゴルフを楽しみました。香港ソフィア会の活動にも参加し、同期の経済学科卒の真下さんと共に、BBQ をしたりボーリング大会をやったり、ソフィアンとその家族の方々と親交を深めました。

昨年のソフィア会ゴルフコンペに参加した際に頂いた賞が「ヤングボーイ賞」でした。四十代後半にしてこのような賞を頂けるとは夢にも思っていなかったのですが、裏を返せば若手の参加が少ないという事実です。経鷺会やソフィア会の活動では年齢にかかわらず温かく迎え入れてもらえます。沢山の方々の参加をお待ちしております。

(自営業 (香港でオモチャ類の製造販売))

## トピックス

### ソフィア・タワー竣工記念式典

3月16日、上智大学6号館(ソフィアタワー)竣工記念式典・竣工記念講演会が開催されました。新6号館は17階建てで、四谷駅付近では最も目立つビルとなりました。

竣工記念式典は1、2階の101教室で開催されましたが、約800席の大教室で国際会議も行える素晴らしい施設です。内装も綺麗です。

式の次第は先ず上智学院高祖敏明理事長のご挨拶で始まり、次いで上智大学アジア人材養成研究センター石澤良昭所長のご講演『人を育て、アンコールを守るー建学の精神に基づく惜しみなき国際貢献』がありました。会場は大勢のご出席者で埋まり、非常に盛会でした。

新6号館は1階から5階までは教室、6階は研究室とソフィアンズクラブ、17階がファカルティクラブという構成となります。7階から15階はテナントオフィス・エリアです。1階の101教室の周りはギャラリーとなっています。「アンコールワットと石像発掘」等の企画展示や「上智大学の設立とイエズス会」の常設展示などが目を引きまします。17階からの風景もすばらしく、ぜひともご覧いただきたいと思ひます。

(大武宏至 1978年 経・経営)

※写真は、FACEBOOK 上智大学経鷺会でご覧ください。

### 香港中文大学との連携講座について

かねてから経済学部企画として構想されていた香港中文大学との「国際交流会」につき、その日程が学部事務局より下記のようにメール連絡がありました。当会としても、ぜひ協力していきたいと思ひますので、皆様のご支援をお願いいたします。

最終発表会、懇親会等については詳細がましまりましたら、別途、ネット等でご連絡させていただきます。

第一週 (香港): 8月 7日 (月) から 11日 (金)

第二週 (東京): 8月 21日 (月) から 25日 (金)

なお、ご担当の網倉教授より、「経鷺会の方々も東京で行われる最終発表会とその後の懇親会にはぜひご参加ください」とのメッセージをいただきました。(経鷺会副会長 田村隆)